副詞「イマダ（未）」の用法から見た『水鏡』の文体的性格

青木　毅

一　はじめに

『水鏡』は、周知のように、『大鏡』の影響を受けて[1]、平安時代末期に成立したとされる歴史物語である。この『水鏡』は、『大鏡』や『栄花物語』などに比べて、これまで文学的・語学的研究の対象とされることが必ずしも多くはなかった作品である。その理由としては、この作品が歴史書の『扶桑略記』のみを材料として叙述されているために[2]、内容的な独自性がほとんど認められないということが挙げられよう。たとえば、加納重文氏は、「『水鏡』を文学作品として考察していこうとするときに、この強い史料依拠の性格は、はなはだ意欲を殺がせるものである」と述べられている[3]。確かに、『水鏡』は、『扶桑略記』の欠損部分の記事を補うことができる点をのぞけば、内容面での史料的価値は低いと言わざるを得ない。しかしながら、文章史の上から見れば、漢文を仮名（交り）文に翻訳[4]（和訳）した文章（以下、これを〈漢文翻訳文〉と仮称する）として重要な位置を占める作品であると考えられ[5]、その意味で、『今昔物語集』（天竺震旦部・本朝仏法部）や『三宝絵』などの文体との関連性が注目される作品でもある[6]。このように、『水鏡』は、国語史料としての価値はけっして小さくはなく、文章史上重要な作品であることは疑いないところであろうと思われる。

本稿では、『水鏡』の文章・文体研究の一階梯として、副詞「イマダ（未）」の用法を手がかりとしながら、〈漢文翻訳文〉としての『水鏡』の文体的性格について考察する。

二　問題の所在

まず、副詞「イマダ」およびそのほぼ同義語である「マダ」の用法と、それらの文体的性格について、これまでの研究において明らかにされている事項を確認しておきたい。その要点は、おおよそ次

の通りである。

①両者とも、本来、肯定表現・否定表現いずれの場合にも用いられた。[7]

②平安時代には、主として「イマダ」は漢文訓読文に、「マダ」は和文に用いられた。[8]

③漢文訓読文において「未」字が「イマダ」と訓じられる場合、打消の助動詞が読添語として補読されるか、同助動詞を「未」字に当てて再読された。[9]

これらを要するに、平安時代において、漢文訓読文では主として「イマダ」が用いられ、原則として否定表現中に用いられたのに対して、和文では主として「マダ」が用いられ、肯定・否定いずれの表現中でも用いられた、ということになろう。

さて、本稿で問題としている『水鏡』における「イマダ」「マダ」の使用状況については、次の通りである。[10]

「イマダ」（全二六例）

〈肯定表現〉（一三例）

①父の用明天皇は帝の御弟にて、いまだ皇子と申ししなり。（中・32敏達天皇）

②鬼の髪は宝蔵にをさまりていまだ侍めり。（中・32敏達天皇）

③その時、聖武天皇はいまだいとけなくおはしましき。（中・44元明天皇）

〈否定表現〉（一三例）

④父帝亡せおはしまして後、いまだ位に即き給はざりしほどに、（上・18履中天皇）

⑤先帝の御時より今に至るまで、世の中の病いまだおこたらず。（中・32敏達天皇）

⑥この種継「佐伯の氏のかゝることはいまだ侍らず」と帝に申し しかば、（下・51桓武天皇）

「マダ」（〇例）

「イマダ」は合計二六例存しており、そのうちの一三例が肯定表現において、また同数の一三例が否定表現においてそれぞれ用いられているのに対して、「マダ」は一例も用いられていない。この『水鏡』における使用状況を、右にまとめた先行研究による説に当てはめてみた場合、どのようなことが言えるのであろうか。結論から述べれば、典型的な和文や漢文訓読文における状況とは、必ずしも一致していないということが言えそうである。すなわち、「イマダ」を用いて「マダ」を用いていない点では和文と一致しておらず、「イマダ」の用法が否定表現に偏っていない点では漢文訓読文と一致していないと言えよう。このことは、漢文体の『扶桑略記』の翻訳によって成り立っている『水鏡』の文体が、典型的な和文とも漢文訓読文とも異なっていることを示していると考えられる。[11] それでは、

〈漢文翻訳文〉たる『水鏡』の文体とは、どのような性格をもつ文体なのであろうか。まず、「イマダ」「マダ」の使用状況を手がかりとして、『水鏡』の文体が、平安時代の仮名文学作品の中でどのような位置を占めているのかという観点から検討を加えることとする。

三　「マダ」「イマダ」の使用状況から見た『水鏡』の位置

表①は、平安時代の仮名文学作品をジャンル別に分類した上で、「マダ」「イマダ」の使用状況を示したものである。これらのうち『宇治拾遺物語』は、鎌倉時代初期の成立であると考えられているが、『今昔物語集』や『古本説話集』と共通する説話を少なからず含んでいるため、[12] 参考までに併せて示しておいた。

表①によれば、「マダ」「イマダ」の使用に、ジャンルによって差があるようにも見受けられるが、ジャンルごとの傾向性を云々するには、作品ごとのバラつきがいささか目につく状況となっている。たとえば、〈歴史物語〉においては、『水鏡』のみ「マダ」が使用されておらず、〈説話類〉においては、作品によって「マダ」がまさっていたり「イマダ」がまさっていたりするといった具合である。このような「マダ」「イマダ」の使用状況は、各作品の文体的性格を反映していると考えられるから、『水鏡』の文体をジャンルとの関連で位置づけることは、いささか困難であるように思われる。

そこで、ひとまず、ジャンルという枠を取り払った上で、「マダ」

（表①）

ジャンル・文献名	伝奇的物語			歌物語			女流日記				随	王朝物語			歴史物語				説話類				
用語・用法	竹取物語	宇津保物語	浜松中納言物語	伊勢物語	大和物語	平中物語	蜻蛉日記	和泉式部日記	紫式部日記	更級日記	枕草子	源氏物語	夜の寝覚	狭衣物語	栄花物語	大鏡	今鏡	水鏡	三宝絵	法華百座聞書抄	打聞集	古本説話集	宇治拾遺物語
マダ	2	155	10	12	10	7	30	8	10	7	39	229	19	44	104	19	65			3		14	14
イマダ 総数	3	16	3	2		1	1			2	1	2	6	6	10	12	7	26	37	2	2	3	25
イマダ 肯定	1	6	2			1				1			2		2	10	2	13	1		2	1	11
イマダ 否定	2	10	1	2			1			1	1	2	4	6	8	2	5	13	36	2		2	14

「イマダ」の使用状況から仮名文学作品を分類してみると、次のようになる。

A「マダ」のみ使用

[欧]大和物語（一〇例）

[日]紫式部日記（一〇例）

[日]和泉式部日記（八例）

B「マダ」「イマダ」ともに使用

（1）「マダ」が優勢（＊上段「マダ」－下段「イマダ」、以下同）

[王]源氏物語（二二九例－二例＝114.5：1）

[随]枕草子（三九例－一例＝39：1）

[日]蜻蛉日記（三〇例－一例＝30：1）

[歴]栄花物語（一〇四例－一〇例＝10.4：1）

[伝]宇津保物語（一五五例－一六例＝9.7：1）

[歴]今鏡（六五例－七例＝9.3：1）

[王]狭衣物語（四四例－六例＝7.3：1）

[欧]平中物語（七例－一例＝7：1）

[欧]伊勢物語（一二例－二例＝6：1）

[説]古本説話集（一四例－三例＝4.7：1）

[日]更級日記（七例－二例＝3.5：1）

[伝]浜松中納言物語（一〇例－三例＝3.3：1）

[王]夜の寝覚（一九例－六例＝3.2：1）

[歴]大鏡（一九例－一二例＝1.6：1）

[説]法華百座聞書抄（三例－二例＝1.5：1）

（2）「マダ」「イマダ」が拮抗（同数）

（なし）

（3）「イマダ」が優勢

[伝]竹取物語（二例－三例＝1：1.5）

[説]宇治拾遺物語（一四例－二五例＝1：1.8）

C「イマダ」のみ使用

（Ⅰ）肯定表現が優勢（＊上段：肯定表現－下段：否定表現、以下同）

[説]打聞集（二例－〇例）

（Ⅱ）肯定・否定表現が拮抗（同数）

[歴]水鏡（一三例－一三例）

（Ⅲ）否定表現が優勢

[説]三宝絵（一例－三六例）

まず、大きく、A「マダ」のみ使用、B「マダ」「イマダ」ともに使用、C「イマダ」のみ使用、の三類に分けることが可能である。その上で、Bについては、「マダ」「イマダ」のいずれが優勢であるかによって、Cについては、肯定表現・否定表現のいずれが優

勢であるかによって、それぞれ分類した。また、Bの項目内部の順序については、「マダ」が優勢であるほどより右側に、「イマダ」が優勢であるほどより左側に位置するように配列した。ただし、その配列を子細に見ると、より右側に配列されている作品ほど和文調がまさっているとは必ずしも言いがたいため、この配列から直ちに作品間の文体差を云々することにはいささか躊躇される（たとえば、『栄花物語』や『宇津保物語』が『伊勢物語』や『更級日記』より右側に位置しているからと言って、前者が後者より和文調がまさっているとは言いがたい）。したがって、ここでは、項目内部の配列順序よりもむしろ、各ジャンル・各作品がどの分類項目に属しているかという点に注目して考察を進めていくこととする。

まず、〈王朝物語〉については、『源氏物語』『夜の寝覚』『狭衣物語』の三作品すべてが同じB（1）の分類項目に所属している。また、〈随筆〉については、『枕草子』一作品しか取り上げていないが、〈王朝物語〉と同じB（1）の項目に属している。それ以外のジャンルでは、作品が二つ以上の項目にまたがって属しているが、それでも、ある程度の偏りを認めることはできる。すなわち、〈歌物語〉と〈女流日記〉の諸作品については、『大和物語』『紫式部日記』『和泉式部日記』がAの項目に、『伊勢物語』『平中物語』『蜻蛉日記』『更級日記』がB（1）の項目に、それぞれ属している。これら〈王朝物語〉〈随筆〉〈歌物語〉〈女流日記〉というジャンルは、文体的に見ると、和文体としての純度が高い部類に属すると言えよう。〈伝奇的物語〉については、『宇津保物語』『浜松中納言物語』がB（1）の項目に、『竹取物語』がB（3）の項目に、それぞれ属しており、〈王朝物語〉〈随筆〉〈歌物語〉〈女流日記〉の四ジャンルに比べると、やや漢文訓読臭を感じさせる文体と言えようか。[13]〈説話類〉については、『古本説話集』『法華百座聞書抄』がB（1）、『宇治拾遺物語』がB（3）、『打聞集』がC（Ⅰ）、『三宝絵』がC（Ⅲ）と、四つの項目にまたがって属しており、作品ごとの文体差の大きいジャンルと言える。〈歴史物語〉については、『水鏡』のみC（Ⅱ）の項目に属しており、B（1）に属している他の三作品（『栄花物語』『大鏡』『今鏡』）とは様相を異にしている。

さて、右のことから、『水鏡』の文体に関してはどのようなことが指摘できるのであろうか。他の歴史物語（『栄花物語』『大鏡』『今鏡』）は、いずれも「マダ」を主用していることから、作品によって程度の差はあるものの、どちらかと言えば和文調の強い文体であることが分かる。それに比べて『水鏡』は、漢文訓読語の「イマダ」を専用していることから、仮名文学作品の中では比較的漢文訓読調の強い文体となっていることが伺われる。ただし、同じく「イマダ」を専用する『三宝絵』において、その用法が否定表現に偏り、きわめて強い漢文訓読調を示しているのに比べると、『水鏡』における漢文訓読調はまだゆるやかであるとも言える。

四　『扶桑略記』との比較

次に、『水鏡』における「イマダ」の使用と漢文訓読調との関係をより明確にするために、『水鏡』の依拠資料である『扶桑略記』との比較を行うこととする。[14]『水鏡』における「イマダ」全二六例のうち、現存する『扶桑略記』との比較が可能な用例は、一四例（肯定表現八例、否定表現六例）である。残りの一二例が存する箇所は、対応する『扶桑略記』の本文が現存していないか、抄出本しか残っていないかのいずれかであって、これら一二例については十分な比較を行うことができない。[15]

さて、比較可能な一四例について、『扶桑略記』[16]の本文とどのように対応しているかを示せば、次のようになる。

〈肯定表現〉

（a）対応する文脈なし（四例）

①父の用明天皇は帝の御弟にて、いまだ皇子と申ししなり。（中・32敏達天皇）

②大臣もいまだ位浅くおはせしに、御沓取りて奉り給へりし（中・40天智天皇）

③その時、聖武天皇はいまだいとけなくおはしましき。（中・44元明天皇）

④猶いまだいとけなくおはしますとて、（中・45元正天皇）

（b）対応する表現なし（四例）

⑤安康の御弟の雄略天皇と申しし帝のいまだ皇子にておはしまし、に、失はれ給ひしかば、（上・25顕宗天皇）

……爲二大泊瀬天皇一見レ殺。（『扶桑略記』第一・顕宗天皇）

⑥鬼の髪は宝蔵にをさまりていまだ侍めり。（中・32敏達天皇）

……鬼髪見在二元興寺寶藏一。（『扶桑略記』第三・敏達天皇）

⑦帝、入鹿を失はんの御心ありき。又、天智天皇のいまだ皇子と申しも同じくこのことを御心のうちに思し立ちしかども、（中・37皇極天皇）

……天皇并中大兄皇子欲レ棄二入鹿一。（『扶桑略記』第四・皇極天皇）

⑧皇極天皇は位をわが御子の天智天皇のいまだ皇子と聞えしに譲り奉らんとのたまひしを、（中・38孝徳天皇）

……天皇之志。欲レ傳二位於中大兄皇子一。有二譲位詔一。（『扶桑略記』第四・皇極天皇）

（c）「未」字が対応（〇例）

〈否定表現〉

（a）対応する文脈なし（一例）

⑨文武天皇、いまだ三十にだに及び給はで亡せさせおはしましにし、

（中・44元明天皇）

（b）対応する表現なし（〇例）

（c）「未」字が対応（五例）

⑩昔よりいまだかゝる事なし。海の水すでに国の内に満ちなんとす。

（上・15神功皇后）

……新羅建レ国以來。未二嘗有一レ聞二海水凌一レ國。

（『扶桑略記』第二・神功皇后）

⑪父帝亡せおはしまして後、いまだ位に即き給はざりしほどに、

（上・18履中天皇）

……先朝崩後。天皇未二即位一前。

（『扶桑略記』第二・履中天皇）

⑫先帝の御時より今に至るまで、世の中の病いまだおこたらず。

（中・32敏達天皇）

……始レ自二先帝之代一。至二于今上踐祚一。疫疾未レ息。

（『扶桑略記』第三・敏達天皇）

⑬汝、心乱れ善根少なくて、浄土へ参るべきほどにいまだ至らず

（中・38孝徳天皇）

……汝心意散亂。善根微少。未レ足レ爲二浄土業因一。

（『扶桑略記』第四・孝徳天皇）

⑭昔より執政の大臣の会ふ事はいまだなき事なり。

（中・44元明天皇）

……新羅國使自レ古入朝。然未下曾與二執政大臣一談話上。

（『扶桑略記』第六・元明天皇）

〈肯定表現〉については、「イマダ」の存すべき文脈が『扶桑略記』に見出されない場合（対応する文脈なし）が四例、「イマダ」の存すべき文脈は見出されるものの、「イマダ」またはそれに対応する表現が存在しない場合（対応する表現なし）が四例、それぞれ認められる。〈否定表現〉については、対応する文脈が『扶桑略記』に見出されない場合（対応する文脈なし）が一例、『水鏡』の「イマダ」に『扶桑略記』の「未」字が対応する場合（「未」字が対応）が五例、それぞれ認められる。なお、「未」字以外の字句が対応している例は、『扶桑略記』との比較が可能な一四例の中には見られない。

右の分類において、『扶桑略記』の表現の影響が最も強く表れているのは、〈否定表現〉における〈「未」字が対応〉の場合である。これは、『扶桑略記』における「未」字をそのまま「イマダ」と訓じ、句末を否定表現で応じている場合であり、『扶桑略記』の表現の影響が直接的に表れている事例と言えよう。ところで、〈否定表現〉は、〈「未」字が対応〉の場合にのみ用いられているわけではなく、用例⑨のように、〈対応する文脈なし〉の場合にも用いられている。このことは、対応する文脈が『扶桑略記』に存しない部分においても、同書の漢文体としての影響が、『水鏡』の本文に間接的

に及んでいることを示唆しているようにも思われる。[17] もしそうであるとすれば、『扶桑略記』の文体（漢文体）の影響は、同書の漢字・漢文を直接訓読した部分において認められるばかりではなく、『水鏡』の文章全体にも間接的に及んでいると考えることができるかもしれない。

それでは、〈肯定表現〉については、どのように考えることができるのであろうか。〈肯定表現〉中の「イマダ」は、対応する文脈や表現が『扶桑略記』に存しない場合に用いられているが、このことは、「イマダ」と訓読されるべき「未」字が漢文中では通常〈否定表現〉として用いられる文字であることから考えると、当然のことである。すなわち、〈肯定表現〉中の「イマダ」は、『扶桑略記』における「未」字の直接的影響を受けて用いられているとは考えがたいということになろう。それでは、〈肯定表現〉中の「イマダ」が『扶桑略記』の影響を全く受けずに用いられたものかと言えば、必ずしもそうとばかりは言えないと思われる。と言うのは、基本的に仮名文である『水鏡』において、和文語の「マダ」が一例も用いられずにもっぱら漢文訓読語の「イマダ」が用いられているという事実は、漢文体で記された『扶桑略記』の影響を考慮に入れて初めて説明がつくと考えられるからである。もちろん、『水鏡』の作者がもともと漢文訓読的な文体を有していたために、「イマダ」が専用されていると考える余地もないとは言えまい。しかしながら、平安時代の〈歴史物語〉四作品の中で『水鏡』だけが「マダ」を用いず「イマダ」を専用しているという特異な状況は、『水鏡』が漢文体の資料（『扶桑略記』）に依拠して成立した作品であることに起因している、と考えるのが自然な解釈であろう。

以上のことから、『水鏡』における「イマダ」の専用（肯定表現もふくめて）は、『扶桑略記』の漢文体としての影響が直接的・間接的に表れた結果であると考えられる。

五　『水鏡』における「イマダ」の用法の文章史的意味

これまでの検討結果より、『水鏡』における「イマダ」の使用状況は、漢文体の『扶桑略記』を仮名文に翻訳した結果として生じたと考えられた。それでは、『水鏡』における「イマダ」の用法の文章史的意味については、どのように理解すべきであろうか。

一般的に、漢文の〈翻訳〉という行為においては、原漢文の文体的価値をできるだけ保ちながら、同時に、できるだけ自然な日本語に置き換えることが要求されると考えられる。『水鏡』において、和文語の「マダ」が用いられず、もっぱら漢文訓読語の「イマダ」が用いられているのは、原漢文の文体的価値を保つための用語選択の結果であろうと考えられる。また、漢文訓読語の「イマダ」を用いながら、否定表現に偏っていないことについては、本来肯定・否定のいずれの表現においても用いられるという、日本語としての自

然な「イマダ」の用法が現れた結果であろうと考えられる。すなわち、前項までに見た『水鏡』における「イマダ」の使用状況は、文章の生成過程（原理）という観点から見ると、漢文を翻訳した文章である〈漢文翻訳文〉ならではの状況を示していると考えられるように思われる。

とすれば、『水鏡』の文体を、〈漢文訓読調の強い和文体〉とか〈和文脈の混在した漢文訓読体〉のように、従来の文体範疇の中で捉えることは必ずしも適切ではなく、〈和文体〉や〈漢文訓読体〉とは異なる別個の類型的文体として捉え直す必要があるのではないかと思われてくる。[18] この点については、今後の検証が不可欠であるため、本稿では、ひとつの問題提起として述べるにとどめておく。

六　おわりに

以上、副詞「イマダ」の用法を手がかりとして、〈漢文翻訳文〉たる『水鏡』の文体的性格について考察を行った。その結果、『水鏡』の文体は、依拠資料の『扶桑略記』の文体（漢文体）の影響により、仮名文学作品の中では比較的漢文訓読調の強い文体となっていることが確認できたかと思う。

その上で、「イマダ」の用法には『水鏡』の〈漢文翻訳文〉としての性格が反映されているのではないかとの考えを述べた。この点については、現段階での見通しを述べたにすぎないが、問題提起の意味を込めて、あえて言及した次第である。

本稿を出発点として、さらにさまざまな観点からの考察を積み重ねることにより、『水鏡』の文体の内実に迫っていきたいと考えている。

〔注〕

(1) 『水鏡』跋文の末尾に、「大鏡の巻も凡夫の為業なれば、仏の大円鏡智の鏡にはよも侍らじ。これも、もし大鏡に思ひよそへば、そのかたち正しく見えずとも、などか水鏡の程は侍らざらんとてなん」と記されている（引用は、注（9）文献による）。

(2) 平田俊春『日本古典の成立の研究』（一九五九年、日本書院）第二篇第三章「水鏡の成立と扶桑略記」。

(3) 加藤重文「『水鏡』記事の独自性―『扶桑略記』との史料比較から―」（『女子大国文（京都女子大学）』百九号、一九九一年六月）。

(4) 稿者は、「翻訳」という用語の概念を、〈ある言語体系（起点言語）で表現されたものを、その意味内容を変えずかつ文体的価値を保ちながら、別の言語体系（目標言語）による表現に置き換えること〉と規定する。

(5) 松村博司『歴史物語―栄花物語・四鏡とその流れ―（改訂版）』（一九七九年、塙書房）「五　水鏡」においては、「漢文・準漢文を訓み替えたものとして文章史からも留意されてしかるべきものであろう」（二三六頁）、「翻訳文章史上の意義等観点を変えて見た場合、別個の価値が与えられることはいうまでもない」（同頁）として、〈漢文翻訳文〉としての『水鏡』の文章に注目すべきことが述べられている。

(6) 『今昔物語集』の天竺震旦部や本朝仏法部における説話の大半は、漢文や変体漢文を出典としており、『三宝絵』は、『日本霊異記』をはじめと

する仏書類を背景として叙述されていることから、共に、その文章の性格を〈漢文翻訳文〉として捉えることができると思われる。

(7) 山田孝雄『漢文の訓読によりて伝へられたる語法』(一九三五年、宝文館)。

(8) 築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』(一九六三年、東京大学出版会)。

(9) 小林芳規「漢文訓読史上の一問題―再読字の成立について―」(『国語学』一六集、一九五四年三月)。

(10) 本文は、金子大榮・松本治久・松村武夫・加藤歌子編『校注水鏡』(一九九一年、新典社)を用いた。なお、同書の底本は専修寺本である。

(11) 漢文の「訓読」と「翻訳」との違いについては、次のように考えている。漢文の「訓読」とは、原漢文を漢字・熟字に対応する訓みに従って訓み下す行為であって、その際、原漢文の構造は基本的に保持される。それに対して、漢文の「翻訳」とは、原漢文を漢字・熟字(またはそれより大きい単位)の意味に相当する日本語に置き換える行為であって、その際、原漢文の構造は日本語として自然な(またはそれに近い)構造に改められる。

(12) 『宇治拾遺物語』の関係説話については、新編日本古典文学全集『宇治拾遺物語』(小学館)巻末の「説話関係表」により、従来の研究成果の概要を知ることができる。

(13) 『竹取物語』と『宇津保物語』における漢文(訓読語)の影響については、築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』(一九六三年、東京大学出版会)において詳しく論じられて以降、今日までにほぼ定説化している。

『浜松中納言物語』は、どちらかと言えば、純粋な和文に近いと考えられているように思われるが、仏教用語が多用されている(稲賀敬二「寝覚・浜松の位置―位置づけの前提条件の一考察―」『国語と国文学』三十六巻三号、一九五九年四月)ほか、漢文の「流涙」の訓読表現「涙を流す」が少なからず用いられている(小林澄子「古代における『涙』をめぐる動詞について」『文芸研究(日本文芸研究会)』百六、一九八五年五月)など、漢文に由来する表現が少なくないことから、漢文の影響がないとは言えない。

(14) 本文は、新訂増補国史大系『扶桑略記 帝王編年記』(一九三二年、吉川弘文館)を用いた。

(15) 『水鏡』と『扶桑略記』とで内容上対応する箇所の認定においては、注(3)文献の末尾に付されている「水鏡―史料対照表」を参考にした。

(16) 『扶桑略記』との対応のあり方は、〈対応する文脈なし〉〈対応する表現なし〉〈「未」字が対応〉の三つの場合に分けることが可能である。ただし、〈対応する文脈なし〉と〈対応する表現なし〉とを截然と分かつことは困難であり、たとえば、用例⑤については、〈対応する文脈なし〉に分類する考え方もあり得るかと思われる。

(17) 用例⑨において、「イマダ」―〈否定表現〉という構造は漢文訓読文のものであるが、〈否定表現〉の部分では、漢文訓読語の「ズシテ」ではなく和文語の「デ」が用いられており、注意される。このことは、漢文の影響が間接的に表れた箇所では、必ずしも純然たる訓読表現が用いられるとは限らないことを示していると考えられる。

(18) 拙稿「『今昔物語集』の文体の一側面―機能動詞「ナス」の分布が示唆するもの―」(『訓点語と訓点資料』九十九輯、一九九七年三月)において、『今昔物語集』『三宝絵』『水鏡』等の〈漢文翻訳文〉には、〈動詞連用形転成名詞+「ナス」〉という表現形式が共通して用いられていることを述べた。このことは、さまざまな〈漢文翻訳文〉がひとつの類型的文体として捉えられる可能性があることを示唆していよう。

〔付記〕

本稿は、平成十四年度広島大学国語国文学会秋季研究集会（十一月二十三日）における口頭発表をもとにまとめたものである。発表の席上、栗竹民・山本秀人両氏より、発表後、森下要治・原卓志・佐々木勇各氏より、貴重な御助言を賜った。本稿では、それを十分生かすことができなかったが、今回生かせなかった点については、今後の研究において解決すべき課題としたいと考えている。心より御礼申し上げたい。

―あおき・たけし、徳島文理大学助教授―